

セロ弾きのゴーシュ

目次

セロ弾きのゴーシュ-----	3
----------------	---

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す
だいろくこうきょうきょく
第六交響曲の練習をしていました。

トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いろ風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシュも口をりんと結んで眼を皿め　さらのようにして楽譜がくふを見つめながらも一心に弾いています。

にわかにはたと楽長が両手を鳴らしました。みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トォテテ　テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額あせに汗を出しながらやっといま云いわれたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いていますと楽長がまた手をぱつと拍うちました。

「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞき込こんだりじぶんの楽器をはじいて見たりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですがセロもずいぶん悪い

のでした。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生けん命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思っていると楽長がおどすような形をしてまたぱたっと手を拍ちました。またかとゴーシュはどきっとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこでさっきじぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思って弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんと踏^ふんでどなり出しました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっているぼくらがあの金^{かな}杏^ぐ鍛^つ冶^{かじ}だの砂糖屋^{でっち}の丁^{めん}稚^{もく}なんかの寄り集りに負けてしまったらいったいわれわれの面目はどうなるんだ。おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたっと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴^{くつ}のひもを引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝^{こうき}あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練習はここまで、休んで六時にはかっきりボックスへ入^{たま}ってくれ給え。」

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマッチをすったりどこかへ出て行ったりしました。ゴーシュはその粗末^{そまつ}な箱^{はこ}みたいなセロをかかえて壁^{かべ}の方へ向いて口をまげてぼろぼろ涙^{なみだ}をこぼしましたが、気を取り直してじぶんだけたったひとりいまやったところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅く^{おそ} ゴーシュは何か巨大^{おお}な黒いものをしょってじぶんの家へ帰ってきました。家といってもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前^{あさ}は小屋のまわりの小さな畑^{えだ}でトマトの枝をきったり甘藍^{キャベジ}の虫をひろったりしてひるすぎになるといつも出て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけるとさっきの黒い包みをあけました。それは何でもない。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床^{ゆか}の上にそっと置くと、いきなり棚^{たな}からコップをとってバケツの水をごくごくのみました。

それから頭を一つふって椅子^{いす}へかけるとまるで虎^{とら}みたいな勢^{いきおい}でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えては弾き一生けん命しまいまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼もまるで血走ってとても物凄^{ものすご}い顔つきになりいまにも倒れるかと思うように見えました。

そのとき誰^{たれ}かうしろの扉^とをとんとんと叩くものがありました。

「ホーシュ君か。」 ゴーシュはねぼけたように叫^{さけ}びました。ところが

すうと扉を押^おしてはいつて来たのはいままで五六ぺん見たことのあ
る大きな三毛猫^{みけねこ}でした。

ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って
来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬^{うんぱん}はひどいやな。」

「何だと」ゴーシュがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシュはひるからのむしゃくしゃを一ぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまら
のもってきたものなど食うか。それからそのトマトだっておれの畑の
やつだ。何だ。赤くもならないやつをむしって。いままでもトマトの
茎^{くき}をかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行ってしまえ。
ねこめ。」

すると猫は肩^{かた}をまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたり
でにやにやわらって云いました。

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシ
ューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしゃくにさわってこのねこのやつどうしてくれようと
しばらく考えました。

「いやご遠慮^{えんりょ}はありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をき
かないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシュはすっかり真っ赤になってひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかに気を変えて云いました。

「では弾くよ。」

ゴーシュは何と思ったか扉にかぎをかけて窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室のなかへ半分ほどはいつてきました。

「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭いて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思ったかまずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。それからまるで嵐のような勢で「印度の虎狩」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチッと眼をしたかと思うとぱっと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶっつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からぱちぱち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがってしばらくくしゃみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにはせあるきだしました。ゴーシュはすっかり面白くなつてますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてくだ

さい。これからもう先生のタクトなんかとりませんから。」

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがってはねあがってまわったり壁にからだをくっつけたりしましたが壁についたあととはしばらく青くひかるのでした。しまいには猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまわりました。

ゴーシュもすこしぐるぐるして来ましたので、

「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。

すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐっとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマッチを一本とって

「どうだい。工合^{ぐあい}をわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖^{とが}った長い舌をベロリと出しました。

「ははあ、少し荒^あれたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマッチを舌でシュッとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫は^{おどろ}愕いたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口の扉^とへ行って頭でどんとぶっつかってはよろよろとしてまた戻^{もど}って来てどんとぶっつかってはよろよろまた戻って来てまたぶっつかってはよろよろにげみちをこさえようとしてしました。

ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱^{かや}のなかを走って行くのを

見てちょっとわらいました。それから、やっとせいせいしたというようにぐっすりねむりました。

次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをかついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうたれやっていると誰か屋根裏をこっこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴーシュが叫びますといきなり天井てんじょうの穴からぼろんと音がして一足びきの灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかっこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシュが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かっこう鳥はすまして云いました。

ゴーシュは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かっこう、かっこうというだけじゃあないか。」

するとかっこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさんな啼くのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかっこうとこうなくのとかっこうとこうなくのとでは聞いていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかっこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれの^{ところ}へ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾いてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

ゴーシュはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかっこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなんでないんです。」

「うるさいなあ。ではおまえやってごらん。」

「こうですよ。」かっこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かっこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六交響樂こうきやうがくも同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どちらがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かつこうかつこうかつこうかつこうかつこうとつづけてひきました。

するとかつこうはたいへんよろこんで途中とちゆうからかつこうかつこうかつこうかつこうとついでさけに叫びました。それももう一生けん命からだをまげていつまでも叫ぶのです。

ゴーシュはとうとう手が痛くなって

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかつこうは残念そうに眼めをつりあげてまだしばらくないていましたがやっと

「……かつこうかくうかつかつかつかつか」と云ってやめました。

ゴーシュがすっかりおこってしまって、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わってるんじゃないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたったもう一ぺんおねがいです。どうか。」かつこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれっきりだよ。」

ゴーシュは弓をかまえました。かっこうは「くっ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」とってまた一つおじぎをしました。

「いやになっちゃうなあ。」ゴーシュはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかっこうはまたまるで本気になって「かっこうかっこうかっこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふっと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかっこうの方がいいような気がするのです。

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になってしまうんじゃないか。」とゴーシュはいきなりぴたりとセロをやめました。

するとかっこうはどしんと頭を叩^{たた}かれたようにふらふらっとしてそれからまたさっきのように

「かっこうかっこうかっこうかつかつかつかつかつ」と云^いってやめました。それから恨^{うら}めしそうにゴーシュを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでもものどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云いました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか。」ゴーシュは窓を指さしました。

東のそらがぼうっと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北の方へ

どんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちょっとですから。」

かっこうはまた頭を下げました。

「^{だま}黙れっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしって朝飯に食ってしまうぞ。」ゴーシュはどんと床をふみました。

するとかっこうはにわか**に**びっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子にはげしく頭をぶつけてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立って窓をあけようとしたが元来この窓はそんなにいつでもするする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかっこうがぱつとぶつかって下へ落ちました。見ると^{くちばし}嘴のつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っていろったら。」ゴーシュがやっと二寸ばかり窓をあけたとき、かっこうは起きあがって何が何でもこんどこそというようにじっと窓の向うの東のそらをみつめて、あらん限りの力をこめた風でぱつと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあたってかっこうは下へ落ちたまましばらく身動きもしませんでした。つかまえてドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出したらいきなりかっこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をぱつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかっこう

が矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでも
まっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなってしまいました。ゴー
シュはしばらく^{あき}呆れたように外を見ていましたが、そのまま^{たお}倒れるよ
うに^{へや}室のすみへころがって^{ねむ}睡ってしまいました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一^{いっぱい}杯
のんでいますと、また^と扉をこつこつ^{たた}叩くものがあります。

今夜は何が来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかし
て^{はら}追い払ってやろうと思ってコップをもったまま待ち構えて^お居り
ますと、扉がすこしあいて一^{たぬき}疋の狸の子がはいってきました。ゴー
シュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、
「こら、狸、おまえは^{たぬきじる}狸汁ということを知っているかっ。」とどなり
ました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ^{すわ}座ったま
まどうもわからないというように首をまげて考えていましたが、しば
らくたって

「狸汁ってばく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て
思わず^ふ吹き出そうとしましたが、まだ無理に^{こわ}恐れ顔をして、

「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キ
ャベジや塩とまぜてくたくたと^に煮ておれさまの食うようにしたもの
だ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってばくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわく
ないから行って習えと云ったよ。」と云いました。そこでゴーシュも
とうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡

いんだよ。」

狸の子は俄に^{にわか いきおい}勢がついたように一足前へ出ました。

「ぼくは^{こだいこ}小太鼓の係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『^{ゆかい}愉快的馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快的馬車屋ってジャズか。」

「ああこの^ふ譜だよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとってわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするかと思ってちらちらそっちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもってセロの^{こま}駒の下^{ひょうし}のところを拍子をとってぽんぽん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾いているうちにゴーシュはこれは^{おもしろ}面白いぞと思いました。

おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやっと思いついたというように云いました。

「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときは^{おく}きたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまずくようになるよ。」

ゴーシュははっとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾い

てもすこしたってからでないと音が出ないような気がゆうべからしていたのでした。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシュはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんとん叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしょってゴムテープでばちんととめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡って元氣をと^{もど}り戻そうと急いでねどこへもぐり^こ込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうとしていますとまた^{たれ}^と誰か扉をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちょろちょろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしご

むのくらいしかないのでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわれたろうというようにきょろきょろしながらゴーシュの前に来て、青い栗^{くり}の実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児^こがあんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲^{じひ}になおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむっとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまっていますがまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎^{うさぎ}さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったことはないからな。もっとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行ったがね。ははん。」ゴーシュは呆^{あき}れてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野鼠^{のねずみ}のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児^こはどうせ病気になるならもっと早くなればよかった。さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になる

といっしょにぴたっと音がとまってもうあとはいくらおねがいでしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシュはびっくりして叫^{さけ}びました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは眼^めを片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここのものは病気になるとみんな先生のおうちの床下にはいって療^{なお}すのでございます。」

「すると療^{なお}るのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐ療^{なお}る方もあればうちへ帰ってから療^{なお}る方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病気がなおるというのか。よし。わかったよ。やってやろう。」 ゴーシュはちょっとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔から中へ入れてしまいました。

「わたしもいっしょについて行きます。どこの病院でもそうですから。」 おっかさんの野ねずみはきちがいようになってセロに飛びつきました。

「おまえさんもはいるかね。」 セロ弾きはおっかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたばたしながら中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい。」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊^かのような小さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫さ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシュはおっかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソディとかいうものをごうごうがあがあ弾きました。するとおっかさんのねずみはいかにも心配そうにその音の工合^{ぐあい}をきいていましたがとうとうこらえ切れなくなったふうで

「もう沢山^{たくさん}です。どうか出してやってください。」と云いました。

「なあんだ、これでいいのか。」ゴーシュはセロをまげて孔のところ^{ところ}に手をあてて待っていましたら間もなくこどものねずみが出てきました。ゴーシュは、だまってそれをおろしてやりました。見るとすっかり目をつぶってぶるぶるぶるぶるふるえていました。

「どうだったの。いいかい。気分は。」

こどものねずみはすこしもへんじもしないでまだしばらく眼をつぶったままぶるぶるぶるぶるふるえていましたがにわかに起きあがって走りだした。

「ああよくなったんだ。ありがとうございます。ありがとうございます。」おっかさんのねずみもいっしょに走っていましたが、まもなくゴーシュの前に来てしきりにおじぎをしながら

「ありがとうございますありがとうございます」と十ばかり云いました。

ゴーシュは何がなかあいそうになって

「おい、おまえたちはパンはたべるのか。」とききました。

すると野鼠はびっくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふく膨^{ふく}らんでいておいしいものなそうですが、そうでなくても私どもはおうちの戸^と棚^{だな}へなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びになんど参れましよう。」と云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちょっと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシュはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしって野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「あああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシュはねどこへど^{たお}っかり倒れてすぐぐうぐうねむってしまいました。

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏にある控室^{ひかいしつ}へみんなぱつと顔をほてらせてめいめい楽器をもって、ぞろぞろホールの舞^ふ台^{たい}から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手^{はくしゅ}の音がまだ嵐^{あらし}のように鳴^おって居ります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうで

もいいというようにのそのそみんなの間を歩きまわっていましたが、じつはどうして嬉^{うれ}しさでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマッチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだぱちぱち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなって何だかこわいような手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいって来ました。

「アンコールをやっていますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなって答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようには行くもんでないんです。」

「では楽長さん出^{ちよつとあいさつ}て一寸挨拶してください。」

「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシュは呆^{あっけ}気にとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシュに持たせて扉^とをあけるといきなり舞台へゴーシュを押し出してしまいました。ゴーシュがその孔のあいたセロをもってじつに困ってしまって舞台へ出るとみんなはそら見ろというように一そうひどく手^{たた}を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度^{インド}の虎狩^{とらがり}をひい

てやるから。」ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

それからあの猫ねこの来たときのようにまるで怒った象おこのような勢いきおいで虎狩りを弾きました。ところが聴衆ちようしゆうはしいんとなって一生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。猫が切ながってぱちぱち火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちょうどその猫のようにすばやくセロをもって楽屋へ遁にげ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあったあのように眼をじっとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思ってみんなの間をさっさとあるいて行って向うの長椅子ながいすへどっかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんながーぺんに顔をこっちへ向けてゴーシュを見ましたがやはりまじめでべつにわらっているようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴーシュは思いました。ところが楽長は立って云いました。

「ゴーシュ君、よかったぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本気になって聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」

仲間もみんな立って来て「よかったぜ」とゴーシュに云いました。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通ふつうの人なら死

んでしまうからな。」楽長が向うで云っていました。

その晩遅く^{おそ}ゴーシュは自分のうちへ帰って来ました。

そしてまた水をがぶがぶ^の呑みました。それから窓をあけていつかか
っこの飛んで行ったと思った遠くのそらをながめながら

「ああかっこう。あのときはすまなかったなあ。おれは怒ったんじゃない
なかったんだ。」と云いました。

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入力：水口充、野口英司

校正：野口英司

1999年7月23日公開

2008年10月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあ
たったのは、ボランティアの皆さんです。

ゼロ弾きのゴーシュ

ゼロ弾きのゴーシュ

発行日 令和元年 8 月 10 日

著 者 宮沢賢二

発行者 長尾貴憲

発 行 一般社団法人日本電子書籍技術普及協会
大阪府大阪市北区梅田 1-11-4-1000

© kenji miyazawa, JETDA 2019